

積極的に話し、コミュニケーションの質を高めようとする生徒の育成(2年次)

～自立した英語学習者の育成に向けた方略の研究～

舘下 真二, 小田 可南子

Shinji TATESHITA, Kanako ODA

概要

1年次研究では、コミュニケーションの機会を求め、積極的に話す生徒の育成を目指した。具体的には、身近な興味・関心のある事柄について既習の知識や技能を生かし、他者との「やり取り」を多く取り入れた。「やり取り」を多く取り入れたことで、他者からの質問内容を踏まえて、内容を再構築することができた。副題を「自立した英語学習者の育成に向けた方略の研究」とし、Pre-TEST や Post-TEST を行ったことで自己をメタ認知し、モニタリングしながら学びを進めることができた。2年次研究では、生徒自身が課題としてあげた「話したいことがあるがその単語や表現が分からない」「話したいことはあるが、何を話すべきかを整理することが難しい」という点を改善していく。具体的には、生徒が主体的に、必要とする単語や表現を学べるように「マイ・ボキャブラリ^{*1}」を一層活用させていくとともに Pre-TEST と Post-TEST を比較する時間を生徒に与えることで話す内容を精選する力を培わせる。さらに、Try out 活動^{*2}を継続的に行ったり、生徒にコミュニケーションの場面や状況を常に考えさせたりすることでコミュニケーションの質を向上させたいと考える。

キーワード： やり取り, マイ・ボキャブラリ, コミュニケーションの質, Try out 活動

1. はじめに～研究の目的

学習指導要領(2017年7月)の総則には育成すべき資質・能力が整理されており、学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力、の2点に大別し、前者には言語能力、情報活用能力、問題発見解決能力が挙げられている。また、それらの育成について、学力の三要素を基にした「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を資質・能力の三つの柱としている。以上のことから、各教科等の学力は、4つの資質・能力と3つの柱で検討する必要があると理解できる。

学習指導要領の外国語科の目標及び内容における「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられている。つまり、単に自分の考えを一方向的に伝えるだけでは不十分であり、相手がどんなことを考えているか、相手がどのような状況であるか、何を望んでいるかという意向を知ること、すなわち他者意識を十分にもつことが重要となる。

2. 生徒の実態(1年次研究の成果と課題)

本校英語科の1年次では、「話すこと(やり取り)」を多

く設定した結果、発話量の増加や、一つのトピックに関して具体的な内容で話すことができる生徒が増えた。一方で、具体的かつ詳細に話そうとすればするほど分からない単語や表現が増えたという生徒の意見もあった。

また、生徒に英語を学習する目的を聞いたところ、「テストで良い点数を取るため」という意見も多くあった。このことをうけて、ダイバーシティ社会において、英語を通じて、多種多様な人の考え方の違いや個性を受け入れ、成長する学びにつなげることが大切である。他者との「やり取り」を継続し、自己の発話を通じた、通じなかったという経験をしていく中で、適切な英語の表現を判断する力が身に付けていくと考える。さらに、学習過程で生徒に自己の学習をモニタリングさせたり、他者の表現方法の多様性に気付かせたりするような授業計画が重要である。

2. 1. 目指す生徒像

本校英語科では、以上の課題や求めを踏まえ、目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・自己の学びを実生活、社会に広げることができる生徒
- ・自己モニタリング^{*3} や他者との「やり取り」を通じて、コミュニケーションの質を高めようとする生徒

3. 研究主題及び副題

学習語彙が従来の1200語から1600語～1800語となり、単に知っている単語を流暢に話すのではなく、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等にふさわしい単語や表現を使用することが求められる。その根底には、他者意識があつてはじめて意味のあるコミュニケーションになると考えられるからである。

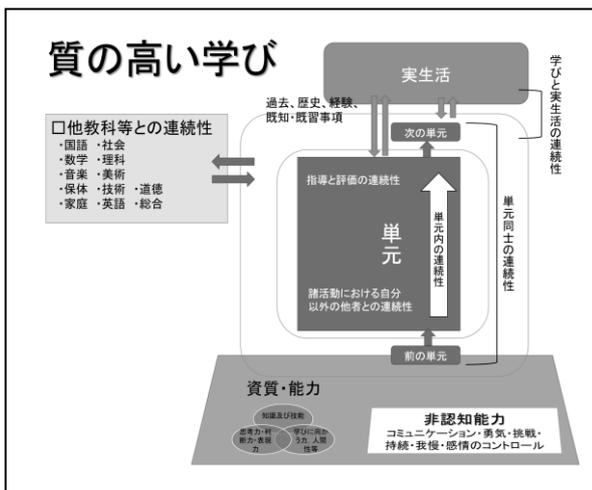
以上のことから、本校英語科の2年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

積極的に話し、コミュニケーションの質を高めようとする生徒の育成(2年次)
～自立した英語学習者の育成に向けた方略の研究～

4. 研究の内容と方法

本校の2年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた「質の高い学び」に向かうために、様々な側面から「連続性」というものを考えることが重要であると捉えている。

本校研究の構造図は以下である。

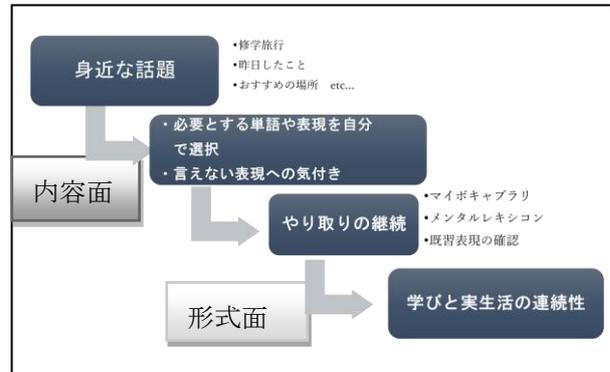


この中で、本校英語科では、特に「学びと実生活の連続性」及び「諸活動における自分以外の他者との連続性」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4. 1. Try out 活動の設定

前述の「学びと実生活の連続性」を実現させる手立ての一つとして、Try out 活動の中に生徒自身の実生活に関わる身近な話題を意図的に設定していく。身近な話題を取り上げることで、生徒自身が主体的に話そうとするのではないかと考える。また、身近な話題の「やり取り」や「発表活動」を通して他者との共通性は何かと考えたり、他者に理解してもらうためにはどのようにした

らよいかという判断を容易にしたりするのではないかと考える。従来のような教師が生徒にターゲット・センテンスを使えるかどうかを重要視していると、練習中は使えるが、そうでないときはその表現を使えないという状況もある。そうではなく、常にオーセンティックな意味のある「やり取り」「発表活動」を繰り返すことで、学びと実生活のつながりがある活動となる。

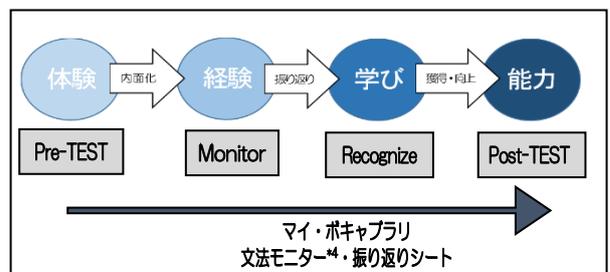


本校英語科における「Try out 活動」のイメージ

この流れを授業で意図的に入れて、長期的な視点で「やり取り」を行っていくことで、既習事項の表現も必然的に繰り返し使用することになる。

4. 2. 「非認知能力」を育む単元学習

生徒の学びの質を高めるためには「非認知能力」を学力と同時に育てていく必要がある。以下に「非認知能力」と本校英語科の授業の単元構成の関わりを図示する。



『「非認知能力」と英語科の授業の関わり』のイメージ

生徒は単元の中で、自分自身が伝えたかったことを思うように伝えることができなかった経験や、他者に伝わらなかった経験をモニタリングしたり、他者と学んだりしながら、非認知能力*5 おける「粘り強さ」「対応力」「協調性」を身に付けていくと考える。

以下のような段階を、単元を通して指導していく。

単元開始時

Pre-Test を行い、生徒自身に身に付けている英語力を再認識させる。また、「振り返りシート」を使用し、単元終了時に目指す理想の自分を設定させる。

単元中間時

生徒自身に使用している単語や表現が適切なものかを振り返る時間を設定させる。生徒は、マイ・ボキャブラリを確認したり、単語をマイ・ボキャブラリに追加する際には、その単語がどのように使用されるのかを考えたりする。この段階においては、コーパス^{*6}を使用し、その単語がどのような場面で使用する頻度が高いのかを調べさせることで、場面や状況にふさわしい単語や表現を生徒自身が確認することができる。また、教師が生徒にフィードバックを与えたり、生徒同士の「やり取り」を ICT 機器を使用し、全体で共有したりするなどして自己表現の再構築を図る。

単元終了時

Post-TEST を実施し、Pre-TEST を比較することで、自己の変容を再認識させる。また、振り返りシートを活用し、単元開始時に目指した自分に向かってどのような点を工夫しながら授業に取り組んだか、単元を通して何を学ぶことができたかなど生徒自身が学習をモニタリングする。

このような段階を踏むことで、ただ単に知っている単語や表現を流暢に扱うのではなく、目的、場面、状況に応じて生徒自身が使用する単語や表現を判断、選択、表現する、つまり質の高いコミュニケーションになると考える。

5. 実践と考察

以上の2つの手立ての効果を確かめるため、本校英語科では、2つの実践を行った。

実践A. ONE WORLD English Course 3

Project 1 「CMをつくって発表しよう！」

実践B. ONE WORLD English Course 1

Project 2 「アンケート調査をして発表しよう！」

5. 1. 実践Aの単元の構想

本単元における実践を行うにあたり、第3学年の生徒に、4月に以下のようなアンケートを実施した。

(1) 英語学習の目的 ※上位2つ選択

①ネイティブと話せるぐらいの会話力を身に付けるため	25人
②グローバル社会に対応するため	43人
③人生の選択肢を増やすため	42人
④テストや資格でよい点数を取るため	34人
⑤論理的思考を身に付けるため	14人
⑥英語という言語の特徴を理解するため	10人

(2) どのような英語学習が好きか ※上位2つ選択

①教科書本文の内容を理解する活動	19人
②ワークシートなどを用いて文法などを練習する活動	21人
③プレゼンやスピーチなどの発表活動	34人
④身近な話題について「やり取り」をする活動	40人

(3) 英語の授業でどのような力を身に付けたいか ※記述式

・自分の言いたいことを伝える力	・習った表現を活用する力
・他者のレベルに合わせて話す力	
・他者に分かるように整理して話す力	

(4) 見通しをもち学習に取り組むことが得意か

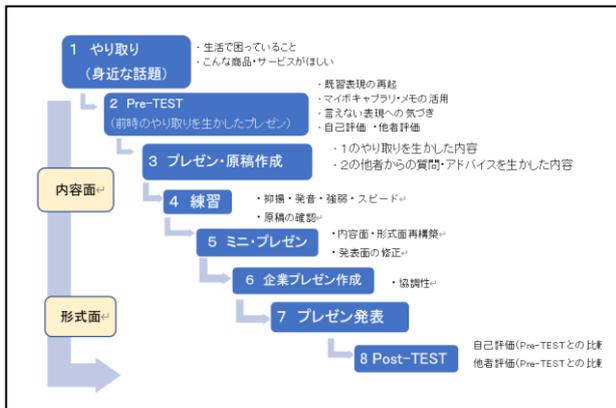
得意	35人
得意ではない	69人

これらの結果を受けて、グローバル化に対応できる人間が求められていることや、社会でもプレゼンやスピーチをする機会が増えてきていることを生徒自身が理解しているのではないかと予想される。また、身に付けたい力が、「他者のレベルに合わせて話す力」「他者に分かるように整理して話す力」といったように、英語を使用する際の生徒の意識が、他者に向けられていることが伺える。一方で、見通しをもち学習に取り組むことを得意としている生徒が少ないことから、Pre TEST を実施し、単元を通して身に付けたい力を自己決定させる。また、振り返りシートを活用することで、目標に近づくための方略を考えさせる。なお、本単元の指導計画は次とおりである。

時	学習内容	評価
1	○問題提起、目的、場面、状況を意識した「やり取り」を行う。[工夫①] ○単元の目標設定を行う。[工夫②]	態
2	○Pre-TEST を行う[工夫②]	態
3	○CM スライド・原稿を作成する。	思・判・表 態
4	・商品開発に向けて、自分の生活と照らし合わせ、必要な表現などを選択する。[工夫①]	
5	○CM スライド・原稿をもとにグループ内でやり取りをし、他者からのアドバイスをもとに再構築する。 [工夫②]	思・判・表 態
6	○作成した個々のCMをグループ内で一つにつなげて企業プレゼンを作成する。	思・判・表 態
7	○CM 発表を行う。 ○振り返りシートで学習の過程を振り返る。[工夫②]	思・判・表 態
8	○Post-TEST を行う[工夫②]	態

本単元では、自分たちが困っていることをもとに、実際にあったらいいと思う商品やサービスを考え、ほしい商品・サービスを創作し、プレゼンテーションをする。授業開始に教師から生徒に会話例を提示するといった従来型の指導ではなく、生徒自身が既習表現の中から必要な単語や表現を選んでいくことが、本研究の「学びと実生活の連続性」を実現させる手立ての一つになる。単元中盤では、生徒は自分が創作した商品について他者と「やり取り」を行い、アドバイスをもらうことで、より他者に興味をもってもらうために工夫をする。単元終了時には、振り返りシートや Post-TEST を活用し、単元開始時に設定した自分に近づくためにどのように工夫をしたか、どのように変容したかを振り返らせることで非認知能力を育ませる。

本単元における学習プロセスは以下である。



5. 2. 実践Aの授業の実際

【1時間目】

テーマ生活で困っていることについてペアで話し合わせた。また、生徒が見通しをもって学習に臨めるよう、本単元のプロセスを提示した。

【2時間目】

学習指導要領外国語科の目標及び内容には「メモやキーワードを頼りにしながら即興で話す力を高めていく必要がある」とある。このことを鑑みて、生活で困っていることやほしい商品・サービスについてメモを生徒に取らせた。その後、前時のやり取りとメモを頼りに Pre-TEST を実施した。Pre-TEST を実施したことで、既習事項を思い出したり、生徒が言えない単語や表現に気づいたりすることができた。また、他者のレベルに合った単語を選ぶことの必要感を感じた生徒もいた。

80語に「おもしろい」いくつかつけて調整したが、いざ話してみると20秒余ってしまった。もう少しゆとりを持って話すといいかと思う。
また、自分が欲しい理由がうすかったので、もう一度構成から考えて良い文章にしたい。

総時間内に終結なくて自分では誰かの単語を使ったつもりだけどもて変換はなげばいい
ないことが分りました

(Pre-TEST の感想)

このプロジェクトで、実際にできるようにならないことは既である。
自分のほしいものを紹介するときに、それをより詳しく説明できるように
やりたい。また、相手に伝わりやすく表現できるように努力したい。
2. 1の目標を達成するために、同じ努力したり質問したりすればいいです。
・他者から評価する形の文章を履くように努力する
・みんなに分かるように、自分の単語や単語、英語で表現するのを意識する

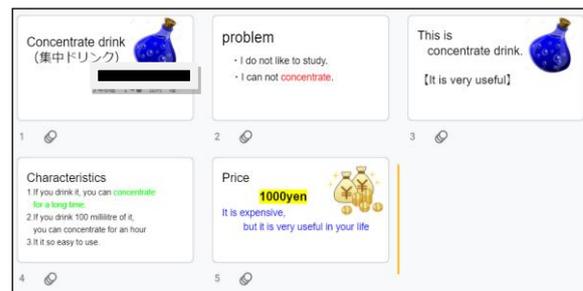
(振り返りシート 目標設定)

【3時間目・4時間目】

プレゼンテーション作成のきまりは以下の通り設定した。

- ・発表は80秒以内 ・原稿は150語 ・スライドは5枚
- ・原稿の中に「生活で困っていること」「その商品がほしい理由」「その商品の特徴」の3点を記載

また、プレゼンテーション資料は Google スライドを用いて以下のように作成した。



【5時間目】

完成後、3~4人の小グループでのプレゼンテーションを行った。グループ内の1人に Chromebook を使用して発表者の録画をさせた。それをもとに生徒にプレゼンの再構築をさせた。

【6時間目】

3~4人の小グループを1つの企業として設定した。企業 PR をグループ内で考えさせることで生徒の思考力・判断力・表現力を一層高めつつ、他者と協力しなければならない状況を設定することで非認知能力の一つである「協調性」を高めることをねらいとした。

【7時間目】

グループごとに企業PRを行った後、一人一人のプレゼンテーションを行った。

【8時間目】

最後に、Post-TEST を実施して、本単元を終了した。以下が生徒の振り返りの記録である。

前回は単語の意味がよく分からなかった使用が長くて相手に伝わりづらかったが工夫して1分30秒以内、伝わりやすく伝えることに相手は伝わりやすくなった。また、前回はよく自分と相手の関係が不明で、また、プレゼンテーションを見る観客の反応もよく、問題を改善できた。
前回よりうまくスピーチができて楽しかった。

前回よりも目線を上げて、ゆくり話すことをイメージして話すことができた。また、文章を一度まとめて少し強調して言うことで商品の魅力を効果的に伝えられたと思う。もう少しリスナーを増やせば、もっと視覚的にもリスルすることができると思うので、また英語で話すことがあったらそのことを意識したい。

(Post-TEST の感想)

このプロジェクトを通してできるようになったことは何ですか。
 自分がオリジナルで考えたプロジェクトを、より分かりやすく伝えるスペースができるようになった。また、難しい単語を使い使って理解しやすい表現を考えられた。
 4. 英語の授業でどのような点を工夫したり改善したりしながら学習しましたか。
 (1) 商品の特徴を伝えるわけでは魅力は伝わりづらいので、疑問を投げかけたりポイントをまとめて強調したりして効果的に伝えることにした。

(振り返りシートの感想)

これらの記述からは、外国語で表現し伝え合うため、自分が伝えたいことを単に伝えるだけでなく、他者との関りに着目して捉え、文を短くしたり、単語を容易なものへと変換したりする生徒の姿が確認できる。また、生徒が自分の課題に気づき、見通しを立てて、粘り強く考えながら真正なタスクに取り組むことができた生徒が多かったことが振り返りシートから見取ることができた。

5. 3. 実践Bの単元の構想

本校第1学年生徒の英語の「読むこと(Reading)」「聞くこと(Listening)」2技能について、2021年11月実用英語技能検定協会の英検IBAテストを実施し、以下のよう結果が得られた。 ※99名受験

級	5級 Lv.	4級 Lv.	3級 Lv.
人数	17人	25人	57人

また、同テスト「生徒向けアンケート」からは、「PC・タブレット・スマートフォンを活用した英語学習をする」ことに関心が高いことが分かった。その他、英語の学習に関する動機について、以下のような回答結果が得られた。

質問:あなたが英語の勉強をするのは、「いろいろな面からものごとが考えられるようになるため」について

回答	割合
とてもそう思う	8.2%
そう思う	11.2%
どちらかというと思う	38.8%
どちらかというと思わない	15.3%
そう思わない	14.3%
全くそう思わない	12.2%

英語の「読むこと(Reading)」「聞くこと(Listening)」2技能について高い能力を持っているものの、その能力を自らの思考の広がりや深まりのために活用しようという意欲が相応に高くないことが課題である。

本単元では、生徒がアンケート調査を行い、その結果を発表する活動を中核に据えている。このように生徒

自身のクラスや友人に関わる身近な話題を意図的に設定していくことが、本研究の「学びと実生活の連続性」を実現させる手立ての一つになると考える。また、生徒が主体的に学習に取り組めるようにするため、単元の開始時に学習の流れを把握させつつ、生徒が質問をする際に「なぜ知りたいのか」、「結果はどうなるだろうか」について深く考えさせる。さらに、生徒の実態として明らかになっているICT機器の活用とも関連させていくことが、より質の高い発表力や生徒の主体性を一層育むと考えた。なお、本単元の指導計画は次のとおりである。

時	学習内容	評価
1	○単元の学習計画を確認したり、教科書の例を用いたりしながら、学習する。 [工夫②]	態
2・3	○Google Formを用いてアンケートフォームを作成したり、クラスメートのアンケートに回答したりする。[工夫①・②]	態
4 (本時)	○事前の予想と結果を照らし合わせ、必要な表現などを選択しながら発表物を作成する。[工夫①・②]	思・判・表態
5	○調査結果の発表を行う。 ○マイ・リフレクションシートで学習の過程を振り返る。[工夫②]	思・判・表態

5. 4. 実践Bの授業の実際

【1時間目】

生徒が見通しをもって学習に臨めるよう、本単元の学習の流を確認した。

1 Learning Plan ¹⁾	
Class ²⁾	Contents ³⁾
1 ⁴⁾	Understand the PLAN/Rubric → Think Questions & Guess the Results ⁵⁾ "What do you want to ask and why?" ⁶⁾
2 ⁴⁾	Make Questionnaire Sheet → Answer (CHROMEBOOK: Google Forms) ⁵⁾ "How do you make a good questionnaire for classmates?" ⁶⁾
3 ⁴⁾	Answer Questions (CHROMEBOOK: Google Forms) ⁵⁾ "How many questions can you answer?" ⁶⁾
4 ⁴⁾	Make Presentation Sheet (CHROMEBOOK: Documents) / Practice Presentation ⁵⁾ "How do you make your presentation better?" ⁶⁾
5 ⁴⁾	Give Presentation → Summery (CHROMEBOOK: Google Forms) ⁵⁾ "How is your / friends' presentation?" ⁶⁾

(本単元の Learning Plan)

また、単元末の発表に関するルーブリックを提示し、目指す姿を共有した。

0. Evaluation (評価)	
0.1 CAN-DO	準備をすれば、人物や調べたことなどについて、短いスピーチを行うことができる
0.2 単元の目標	クラスのことをより知るために、アンケート調査を実施し、その結果を発表したり、クラスメートの発表から概要を捉えたりすることができる。 【聞くことーI、話すこと [発表] ーI】

※次ページに続く

0.3 観点別評価		
0.3.1 【話すこと】		
観点	評価規準	評価
思考力 判断力 表現力	アンケート調査について、 事実・感想の2つの点について、調査したい動機や事前の予想を踏まえて、明確に述べている。	A
	アンケート調査について取り上げ、 事実・感想の2つの点について述べている。	B
	Bの基準を満たしていない。	C
主体的 に学習 に取り組む 態度	相手に自分のことをより理解してもらえるように、アンケートの結果について、 簡単な語句や文を用いて、事実・感想の2つの点について述べている。また、アイコンタクトを意識し（原稿をほとんど見ない）、身振り手振りを使ったりするなど、工夫して話そうとしている。	A
	相手に自分のことをより理解してもらえるように、アンケートの結果について、 簡単な語句や文を用いて、事実・感想の2つの点について述べている。	B
	Bの基準を満たしていない。	C
0.3.2 【聞くこと】		
観点	評価規準	評価
思考力 判断力 表現力	アンケート調査について、 事実・感想の2つの点について、調査したい動機や事前の予想を踏まえて、明確に聞けている。	A
	アンケート調査について取り上げ、 事実・感想の2つの点について聞けている。	B
	Bの基準を満たしていない。	C

(本単元の Evaluation/Rubric Sheet)

その後、教科書にある例を用いて学級内でアンケート調査を行い、単元末の発表のデモンストレーションを体験した。

【2時間目】

クラスメートに尋ねたい質問は何か、なぜそれを尋ねたいのか、どのような結果が予想されるのかについて考えた。その後、Google Classroom のクラウド上に、Google Forms を用いてアンケートフォームを作成した。

What do you do in New Year's Eve? *

回答を入力

Do you like Asahikawa?

Yes

No

(生徒が Google Forms で作成したアンケートフォーム)

その後、スプレッドシートにそのリンクを張り付けた。

A	B	C
1	URL (PASTE here)	
2	https://forms.gle/KS9u5u8RGLUlyvT69	
3	https://docs.google.com/forms/d/1En24pF4zNewVj2kCg2PqX7zF0Mm9D3p0q9Djckd8	
4	https://forms.gle/8v5jUj5vY1Wqk5n8	
5	https://docs.google.com/forms/d/1_v0F9zMDPFWuFnd_4t63uJ06vYk6vJaxZSaTaTmXuc8	
6	https://forms.gle/8v5jUj5vY1Wqk5n8	
7	https://forms.gle/8v5jUj5vY1Wqk5n8	

(アンケートフォームのリンクを張り付けるシート)

ほぼ全ての生徒が Google Forms を初めて使用した。「どうすれば『選択肢のあるフォーム』や『記述式で回答

するフォーム』ができるのか?」、「得た解答はどのようにデータ処理されるのか」等、試行錯誤しながらも、不明な点はヘルプを参照しながら、主体的にアンケート作成に努める様子が見られた。

【3時間目】

前時に作成したアンケートフォームを活用し、クラスメートが作成した質問に答えた。同時に自分がアップロードした Google Forms にアクセスし、その時点での回答数や回答の内容を確認したり、どのようにグラフや表を用いてデータ処理させるかを把握したりもした。



(生徒が自身のフォームにアクセスし、確認している様子)

【4時間目】

授業の導入時に、プレゼンテーション資料の作成や発表のイメージを把握した上で準備をさせるため、当日の給食のメニューに関するアンケート調査のデモンストレーションを行った。



(教師からのアンケートの質問に、挙手で答える様子)

「なぜ知りたいのか?」、「予想される結果はどんなものか?」について触れたり、ルーブリックを確認したりしながら、プレゼンテーションへの準備活動に対して動機付けを行った。

授業の展開部では Chromebook の Documents を用いて、発表物の作成を行った。2時間目のワークシートを用いて予想した結果と実際の結果を比較し、Google Forms の「回答」のタブから表示されるグラフや表を見て、どのデータを活用するかを選択した。その際に TS Talk を行い、生徒とのやり取りを通じて、どのような点を

さらに改善し発表したら良いかを確認しながら、発表物を作成させた。



(発表物の作成中に TS Talk を行う生徒の様子)

授業の終末部では、改善した部分やさらに工夫した点を中心に共有・確認したり、次時の活動の流れを説明し、見通しをもたせたりした。

【5時間目】

プレゼンテーションの流れを確認し、発表を行った。生徒は Chromebook を用いて発表物を提示し、発表を行った。聞き手役となる生徒は内容をメモしながらスピーチ後に質問をしたり、発表者の評価を行ったりした。



(実際のプレゼンテーションの様子)

発表後にはリフレクションシートを用いて、友人の発表をまとめ、自らの発表について振り返りや自己評価を行わせた。

1 Listening MEMO	
Stu. No.	Contents MEMO (内容)
1 10	He asked Do you like games? and so on. 19 students like games. 5 students don't like games. He was sad. Because in this class, there are students who don't like games.
2 53	She asked Do you like music? Who is your favorite singer? and so on. 25 students like music. 5 students don't like music. 17 students like J-pop. 6 students like K-pop. She felt happy because she likes K-pop.
3 56	She asked Do you like books? What book do you like? and so on. 2 students like Harry Potter. 2 students like love stories.

(Listening MEMO への記述)

2 Self-Evaluation		
観 点	評 価	具体的な学習の成果および課題
話すこと 【思・判・表】	A	自分の予想と感想を具体的に伝えられた。また、予想と結果を比較して、思ったことも伝えられた。
話すこと 【態度】	B	書いたことを忘れてしまったり、クロムをみて話すことが多かったため。 手で数を示したりの手はできてよかった。
聞くこと 【思・判・表】	A	聞きながら、聞いたことや考えていたことを聞き取り、メモをして自分の予想と照らし合わせることができた。

(自己評価の記述)

6. 今年次研究の成果と課題

本稿では、これまで2年次研究について述べてきたが、以下に本研究の成果と課題、および今後の展望を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校英語科の2年次研究では、「積極的に話し、コミュニケーションの質を高めようとする生徒の育成」を目指してきた。コミュニケーションは言語と非言語に分類されるが、伝える・聴くといった言語的なものとジェスチャーやアイコンタクトといった非言語的なものに分けられ、生徒がこれら全てを積極的に使用することを意図している。コミュニケーションの質とは、他者とのかかわりに着目して捉え、コミュニケーションの目的や場面、状況をふまえて状況を整理しながら話すこととしている。副主題として、「自立した英語学習者の育成に向けた方略の研究」とした。本研究では、Try out 活動において身近な話題を取り上げ、生徒自身がコミュニケーションの目的や場面、状況をふまえて、使用する語彙や表現を判断し、コミュニケーションに取り組んでいた。また、Pre-TEST と Post-TEST といった自己モニタリングを通して自分の課題に気づいたり、他者にとって、より分かりやすい内容にするための手立てを考えたりするなど粘り強く取り組んだ生徒が多かった。このことは、生徒自身が話したいことを単に話すのではなく、他者との関わりを意識した表れだと考える。

その結果、実践AではPost-TESTを受けた97名中87名が Pre-TEST より Post-TEST の自己評価が高かった。逆に Pre-TEST より Post-TEST を低く自己評価した生徒はすべて英語の外部試験で上位層の生徒であった。この上位層の生徒たちはいずれも「練習をした結果、逆に話すスピードが速くなってしまった」という意見もあることや求める自己理想像が高い生徒である可能性が高い。また Post-TEST の結果から、上位層の生徒ほど、もともと選択できるだけの語彙や表現が豊富であったこ

とから、早い段階で語彙や表現を容易なものへと変更しており、練習回数が増えるにつれて生徒の意識が形式的(語彙・文法など)なものから発表的(アイコンタクト・音量・スピードなど)なものに意識が向けられていることがわかった。生徒の振り返りシートの感想にも、「始めと比べてより聞き手を意識したスピーチをすることができた」「適切な語彙を選択したり、アイコンタクトやジェスチャーなどを使用したりすることができた」「スピーチ中に積極的に聞き手とコミュニケーションをとることができたので今後のスピーチでも聞き手とのコミュニケーションを大切にしていきたいと思った」との感想が多くあった。

また実践Bでは、Try out 活動としてアンケート調査の事前には「結果の予想」を行い、事後の振り返りでは「予想と実際の結果の比較」を行なった。また、学習や英語を用いたコミュニケーションにさらに意欲的に活動できるようまた、ICT機器を活用し、Google Form を用いて学級全体にアンケートを取ったり回答したりすることで、短時間で多量のデータを集めることが可能となった。興味深い学習活動に慣れ親しんでいながら、英語を活用しようとする様子が見て取られた。

6. 2. 研究の課題と今後の展望

成果があった一方で課題もある。

①コミュニケーションの質を高めるための方略

英語を得意としている生徒にとっては、語彙や表現が単元の学習に対してすでに豊富であることが考えられる。一方で英語を得意としていない生徒にとっては、コミュニケーションを支える語彙や表現が少ないことも多い。語彙は特に「発表語彙」と「受容語彙」に分けられていることから、特にプロジェクト型授業をする際には、発表語彙の知識を深める必要があると感じた。また、コミュニケーションをするということは、当然意思疎通がうまくいかないこともある。例えば、他者が「I went to Asahiyama zoo yesterday.」言ったことに対して、「I don't know.」と単に返答するのではなく、「You went to Asahiyama zoo yesterday.」と他者が言ったことを繰り返したり、「Can you say that again?」と確認したりする方略がある。このように工夫してコミュニケーションを続ける方法を継続して指導していきながら、コミュニケーションの質を高めることに役立つと考える。

②ICT 機器の活用場面

プレゼンテーションの発表物を作成する際や Pre-TEST や Post-TEST ならびにプレゼンテーションの発表の様子を録画する際などに ICT 機器を活用した。本研究では、ワークシートを活用し、生徒は振り返りをしたが、今後 ICT 機器を活用して、学習の振り返りを行わせ

検証したい。ワークシートを活用して自己の学習を振り返ることと ICT 機器を活用して自己の学習を振り返ることを比較させ、どちらが生徒にとって自己の学習を調整したり、振り返ったりすることが容易なのかを考えたい。

注釈

- *1 本校研究においては「マイ・ボキャブラリ」を以下のように定義する。「マイ・ボキャブラリとは『単元末の課題を達成するにあたり、教科書で扱われる語彙に加え、生徒それぞれが自分の考えを伝えるために必要な語彙』とし、本校研究で述べる「自分の英語」における「語彙」の範疇とする。
- *2 生徒が既習事項の中から必要なものを自分で選んで(即興で)話す活動。日頃の授業でターゲット・センテンスを中心に練習させることで終わらずに、それまで習ったことを活用するために、生徒が自分で選び、話す時間を作ることによって、コミュニケーション能力を育成する活動。
- *3 本校研究においては、「振り返りシート」で自己の学習を振り返るだけでなく、自分が発話した内容を振り返るという意味合いで総括して総称した。
- *4 スティーブン・クラシェンが唱えた意識的に「学習」した知識は、「習得」されたシステムによって発話しようとしている内容が正しいかどうかをチェックするモニターとして機能し、このモニターによって発話の内容を変えることができるというモニター仮説を本研究では、形式面だけに着目し、このように総称している。
- *5 生徒が自分の課題に気づき、見通しを立てて真正なタスクに取り組んでいくことを非認知能力における「粘り強さ」として捉える。他者のレベルに応じて、使用する単語や表現などを合わせていくことを非認知能力における「対応力」とする。またプロジェクト型授業を通して他者と協力して取り組むことを非認知能力における「協調性」とすると本校英語科として捉える。
- *6 言語学の研究者によって蓄積された書籍や新聞・雑誌などさまざまなメディアで使われている言葉のデータベース。

参考文献・論文

- (1)文部科学省。「新学習指導要領解説 外国語編(2019年7月)」.p135
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(65)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(66)」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(67)」
- (5)中央教育審議会。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年12月)」
- (6)文部科学省。「学習指導要領解説(平成29年7月)」
- (7)石塚博規。「小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント」。開隆堂出版.2011
- (8)松浦伸和。「中学校外国語科における「主体的・対話的で

深い学び」の学習指導の改善と充実」.公益財団法人日本
教材文化研究財団.2017

(9)西岡加名恵.「「逆向き設計」で確かな学力を保障する」.明
治図書.2008

(10)高見砂千.「言語活動の充実を図る「逆向き設計」による中
学校英語科の指導に関する研究－授業デザイン力を高める
「逆向き設計シート」の開発と実践－」.2012

(11)大修館書店.「英語教育5月号」.2021

(12)高橋昌由.「英語×『主体的・対話的で深い学び』」.大学
教育出版.2021